

メリーゴーランドと 魚釣り



かしおり

絵：ニキ

メリーゴーランドと魚釣り

白い馬でなければ嫌なのだと彼女は言い張った。

おかげで僕はかけよる子どもを押しわけ、ファンシーで、グロテスクなその白馬の背を彼女のために確保したのだった。

もう三度目だ。

さすがの僕も不動の地面に降り立ってめくるめく彼女と白馬を見守ることにした。

白馬は不自然に四肢を折り曲げ、上下に揺れながら右から左へと移動していく。その胴を突き刺す一本の金属棒に絡まって、やはり上下しながら彼女も右から左へと移動していく。笑っている。すごく、笑っている。

本当に嬉しそうに、本当におかしそうに、声をたてて笑っている。こっちを見て手を振る。僕も振り返す。手を振り続ける。僕の前を通り過ぎてても振っている。その手は僕になど向けてなかった。彼女は僕を見ていない。そして笑ってる。すごく、笑ってる。

ひよっとして向こう側にまわりこんでも笑っているのだろうか。笑って手を振り続けているのだろうか。



「いやーん、超かわいい」

彼女の甲高い声が耳を突く。

「わたしってこういうのめっちゃ弱い人なのー」

目をくりっと見開いて僕を見上げるその顔は、サークルの男連中みんなが憧れる文句のないアイドル顔だ。彼女が僕をカレンに選んだとき、そりゃあもう大変だったのだ羨望と嫉妬の嵐で。僕自身だって大変だった、舞い上がって、ただもう舞い上がって。

ペットショップの軒先のゲージ前にしゃがみこんだ彼女をぼんやりと見下ろす。彼女は何も変わってない。相変わらずすごく可愛い。さっきも歩いているときに道端にいた三人組の男たちが、顎を引き、息を殺し、彼女が通り過ぎるのをじっと見つめていた。隣の僕なんて目に入っていない。彼女が恥らうように下を向き肩にかかった髪を後に跳ね飛ばしたのを見て、まるでくすぐりあうように身をよじって肩を叩きあっていた。

彼女はゲージの中のトイプードルの鼻先を撫でている。

僕はそれをしらけた気持ちで見下ろしている。

占いなんて信じるほうじゃない。夢占いがどれだけの信憑性があるかなんて全然知らない。それでもなんか分かってきたんだ。

最近立て続けに見るこの夢の、今朝は続きを見た。

彼女は手を振りながら右から現れ、僕の前を通り過ぎ、左へと消えていく。僕は意を決してそこを立ち去った。

怖い怪物に追いかけてられてもう逃げ切れないと思ったときに意を決して目を覚まそうとしたり

、トイレに行きたくて便器の前に立ったとき、あ、やばいと思って意を決して目を覚ましたり、そんな感じで、僕は今朝、夢の中に意を持ち込んでメリーゴーランドの前から立ち去ったのだ。

「あのさ」

僕は彼女の後頭部に言った。

「いやんいやん、くすぐったい」

耳に付く高い声。誰にアピールしてんだ。

「あのさ」

僕はもう一度言う。

彼女は振り返り、肩の髪を跳ね飛ばす。目をくりっと見開いて僕を見上げる。何度もめくったグラビアページみたいだ。

「やっぱりもう無理だよ。ごめん」

僕は意を決してそこを立ち去った。

彼女はしばらくじっとしたままだった。そして数十メートル歩いた僕に後から突進するように駆け寄り、腕を掴んだ。

「なにそれ」

聞いたことのない低い野太い声だった。相変わらず目は見開いているが、丸みはなく、視線で刺し殺そうとするばかりに鋭く睨みつけている。ぼくはどぎまぎと目をそらす。あ、いや、と口ごもっていると、僕の腕を掴んでいた手の力を緩めそのまま自分の腕を巻きつけてきた。

「あたし、チョコタルトが食べたいな」

さっきの野太い声がそら耳だったかと思うくらいに高く甘えた声だった。吐息が腕に掛かる。暑苦しい。彼女だって本当は気付いているんだ。だけど彼女のプライドがそれを許さない。でもこれ以上付き合ってもお互いに何もいいことない、そう思う。

僕は意を決して彼女の手を振りほどいた。

「ごめん、ほんとに」

そして深々と頭を下げた。

その日からが大変だった。

まずサークルの男女問わず全員から無視された。誰に話しかけてもまるで反応がない。彼女が遅れて姿を現すと、女の子たちはわらわらと駆け寄り重病人をいたわるように声を掛け、肩に手を置き、憐憫の表情でうなずきあった。男たちはそれを遠巻きに見ながら、さっきまでまるきり無視していた僕を、顎を上げてあからさまに睨みつけた。

なんだよ。なんなんだよいったい。俺が何したっていうんだよ、と叫びたかったが叫べなかった。ただいたたまれずその場をこそこそ逃げ出した。

無理もない。分かってる。サークルのみならずキャンパス中のアイドルをふったんだ。反感を買ってもしようがないとは思う。でも、気付いちやっただ。最初は嬉しくて、舞い上がって、こんな僕でいいんですか、と無我夢中で付き合い始めたけど、少し冷静になると、だからって好きなわけじゃなかったって。

気付いちやっただから、どうしようもない。

K先輩に呼び出された。

「お前、どういうつもりなの」

「どういうって」

「彼女のことあんなに傷つけて、何とも思わないのかよ」

Kさんもまた女子学生が憧れてやまない学園のアイドルだ。

「いや、あの」

Kさんはじっと僕を見る。重い罪を犯した愚か者を、それでもなんとか救済してやろうとするような慈悲深い目だ。こういう優しさに女の子は惹かれるんだろう。彼女もKさんみたいな人と付き合えばいいのに。

「僕なんかじゃもったいないですよ」

おどおどと僕はつぶやいた。

「何言ってんだよ、彼女がお前を選んだんじゃないか」

「いえ、僕なんて全然、そんな、たいしたやつじゃないし、どっちかっていったら先輩みたいな人のほうがお似合いだと……」

「何言ってんだよ！」

Kさんが声を張り上げた。すこしびっくりする。

「俺のことなんか関係ないだろ！」

そう言ったKさんの顔には否定しがたい自尊心がべったりと貼り付いていた。慈悲なんて嘘だ。なんだ、この人も同じだ。

「いえ。はっきりと分かったんです。僕なんか彼女にふさわしくないんです。先輩のほうがずっと彼女にふさわしいんじゃないですか」

嫌味のつもりで言ってみる。彼女のこと好きじゃなかったんですと言えない僕は、だけど誰より嫌らしい。

しばらくしてKさんと彼女が付き合い始めたと思った。

なんだそれ。

陳腐だなあ、と思った。やっぱりな、とも思った。

でもそのおかげで僕への風当たりがだいぶマイルドになってほっとした。彼女と付き合いおうが別れようがほとんど何の態度の変化も見せなかった数少ない、だが確かな友人だけが残って、それにもほっとした。ああ陳腐。

もうしばらく恋愛沙汰はいいや。

アパートの隣の部屋の前にスーツ姿の男が立っていた。ドアは半開きで、中から若い女性が顔を出していた。高梨さんだ。名前だけ知っている。毎日そのドアの前を通りながら表札だけは目にしてきたのだ。女の人だったのか。

高梨さんは明らかに当惑した顔で男を見つめていた。背の高い品のいい中年男だった。黒い革靴がてかてか光っている。無闇に女にまわりつくようなタイプには見えない。やむにやまれず彼女のところへやってきたのだろう。

陳腐だ。

どいつもこいつも、どこもかしこも、世の中陳腐なドラマに満ちている。

係わり合いにならないようにこそそと男の後ろを通り抜けようとした。その瞬間、高梨さんと目が合ってしまった。

「あ、おかえりなさい」

表情を変えて明るい声で高梨さんは言った。いつもそうやって声を掛け合っている親しい隣人のように僕に笑いかけた。挨拶など一度もしたことないのに。顔合わせたことすらないのに。なんだか良く知らないけど彼女が陥っているややこしい状況から脱するために僕を利用しようとしているのだ。やめてくれ。僕は関係ない。

同じように挨拶し返すのは白々しい気がして、あいまいに頭を下げ、黙ったままそこを立ち去ろうとした。が、高梨さんは必死だった。

「あ、ねえ。今日実家からとうもろこし送ってきたの。良かったら少し持って行って。ね、お願い。ひとりじゃ食べきれないから」

ドアを大きく開き、そこに立ちふさがる男を押しつけ、僕の腕を掴んだ。肩に頬を押し付ける勢いで僕の顔を覗き込む。

「それじゃあね」

高梨さんは男にそう言うと僕を部屋に引っ張り込み、勢いよくドアを閉めた。

ユカ、もう一度ちゃんと話をしよう、ドアの向こうから籠った男の声がした。ユカ、頼む、開けてくれ、その声を断ち切るようにがしゅんと鍵をかけた。チェーンを掛ける音まで彼にはしっかり聞えただろう。しばらくしてかつかつかつという硬い靴音が響き、遠ざかっていった。僕はあの上品な革靴を思い浮かべた。

鍵のかかった部屋に初対面の男と取り残されている状況に、その靴音が消えてようやく彼女は気付いたらしかった。しっかりと掴んだ僕の腕をぎこちなく放した。

すみません、という彼女の言葉と、それじゃ、という僕の言葉が重なった。彼女はおどけるように僕に微笑みかけた。うっかり微笑み返しそうになったけれど、そこはこらえてもう一度「じゃあ僕は」と言って、ドアノブに手を掛けた。

「ちょっと待って」

高梨さんがまた僕の腕に触れた。今度は強引に掴んだりしなかった。

「実家からとうもろこしを送ってくれたのは本当なの。少し持って行って。迷惑かけたお詫びに」

「いえ、いいですよ」

「食べきれないから」

笑った高梨さんの目がお願いよと言っていた。僕は仕方なくそのままぼさっと立って待つことになった。高梨さんは玄関からオープンになっているキッチンの床に置いてあるダンボールの前にしゃがみこんで、その中から一本、二本、と声に出しながらとうもろこしを取り出した。そして緑色の皮に包まれ先端にふさふさと薄黄色の髭を生やしたとうもろこしを五本抱えて僕の前に立った。

露骨にたじろいだ僕を見て、高梨さんは眉根を寄せる。

「さすがに一人暮らしの男の子にこれはないか」

自分の腕の中のとうもろこしと僕の顔を見比べて高梨さんは言う。僕はなぜだかむきになった。

「いえ、大丈夫です。いただきます」

「大きな鍋持ってるの」

「ないけど、大丈夫です」

僕は言い張った。それでも高梨さんが抱えたとうもろこしをちっとも渡そうとしないので、といってそこから奪い取るわけにもいかず、いらいらしながら途方にくれた。

「茹でてあげる。すぐだから」

結局高梨さんは抱えたとうもろこしをシンクの中にごろごろと転がり落とした。

「いいですよ」

「いいから。とりあえず入ったら」

高梨さんは背を向けたまま言った。躊躇している僕を振り返って、「ね」と首を傾げながら微笑んだ。

僕はもうなんだか面倒になっていた。ここでかたくなに拒み続けているのも馬鹿みたいだ。分かっている、高梨さんに「男の子」と言われたのが気に入らなかったのだ。それでむきになった。大きな鍋持ってなくなつて大丈夫だと子どもじみた意地を張ってみたりした。それをさっきの笑顔で高梨さんにもばれているような気がして、なんだかほんとにどうでもいい気持ちになった。

僕だって男なんだぞ、とシンクに向かう華奢な高梨さんの背中に心の中ですごんでみる。さっきかたくなに入室を拒んだあの男と同じ男なんだ、僕を入れたことで後悔するかもしれないぜ、などと悪い男になったような気持ちでスニーカーを脱いだ。

しかし高梨さんは悪い男に缶ビールをひとつ授け、火に掛けた大なべの見張りを言いつけて「着替えてくる」と奥へ引っ込んでしまった。しかたなく僕はビールをちびちび飲みながら、たつぷりと湛えられた水の表面をぼんやりと眺めていた。沸騰するまでだいぶかかりそうだった。

白いティシャツにジーンズ姿で、長い髪を後にひとつでまとめながら高梨さんが戻ってきた。「だいぶかかりそうね」

鍋をのぞきこんでそうつぶやく。鍋の内側によく細かな水泡が付き始めた。高梨さんは自分の分の缶ビールを冷蔵庫から取り出して勢いよく飲んだ。半分は確実に飲んだだろう高梨さんは缶から唇を離すと、はぁーと大きなため息をついた。そして僕を見てまたにっこりと微笑んだ。

「おいしいね」

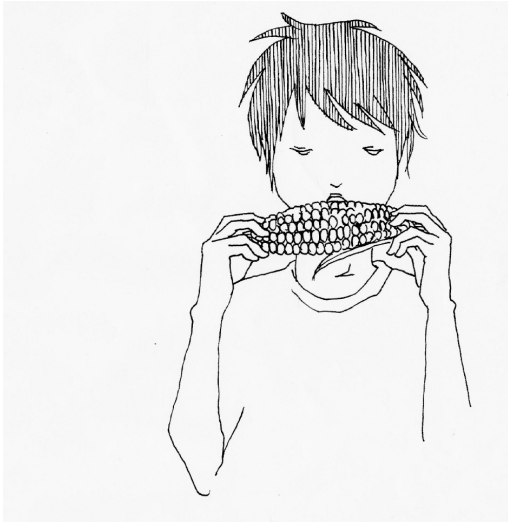
高梨さんは缶ビールを掲げて言った。そうすね、と僕は無愛想に答えた。悪い男というよりもはや拗ねて甘えている駄々っ子みたいになっている僕だが、ねじくれた気分はなかなかもとに戻らない。

「ごめんね、なんか無理やり引き入れちゃったみたいで」

高梨さんが少し表情を曇らせたので、いっすよ、とほんの少し声のトーンを和らげた。上目遣いで僕を見ていた高梨さんがまた表情を崩す。

「まあ、飲んで」

そう言って僕の背中を軽く叩いた。僕はぐいっと缶ビールを傾けた。



高梨さんは料理上手だった。焼き茄子、竹輪ときゅうりと若芽の酢の物、豚キムチ。そして茹でたのとうもろこし。手際よく酒のつまみを次々作り、テーブルの上に並べた。僕は結局、とうもろこしが茹で上がった後も高梨さんの部屋に居座って一緒にビールを飲み明かしたのだった。

「一人暮らしの女の料理上手ってのもなんか悲しいっすね」

僕のねじくれた気持ちはまだそのままなのだ。

「ほんとよ。ほっといて」

高梨さんはでも気を悪くする様子もなく、むしろそれを楽しむように付き合ってくれた。

「だけどメリーゴーランドの夢で女の子をふる男よりはましよ」

酔っ払った僕は終わったばかりの恋の話をなぜだか初対面の高梨さんにべらべらとしやべっていた。

「酷い男ねえ」

高梨さんは意地悪く笑った。

「ほっといてください」

僕はまたすねたふりをする。こんなふうに軽い口を叩きあっているのが楽しかった。酔っているせいもあるのかもしれないけれど、なんだか初めて会った人のような気がしない。実の姉のように気兼ねがなかった。

「そういう自分はどうなんですか」

「何が」

「さっきの男と」

「.....」

「別れたんでしょ。それとも何かもめてるんですか」

高梨さんは急に酔いが回ってきたかのように目の下を赤らめて、ぼんやりと黙り込んだ。さすがに調子に乗りすぎたのかもしれない。

しばらく沈黙が続いた。僕はとうもろこしに手を伸ばし、ぼりぼりとかじった。甘かった。余計なこと言っちゃったなど後悔して、ひたすらとうもろこしをかじった。繊維が歯に挟まった。それを掻き出すのもためらわれてそのままにしたので、余計に居心地が悪くなった。

話題を変えようと必死に言葉を探していると、ふいに高梨さんが口を開いた。

「魚釣りに行ったの」

「え？」

「さっきの男と」

ああ、と僕は馬鹿みたいに頷いた。

「夏ってなんだか昔を思い出させるよね」

高梨さんは空になった缶を弄び、首を傾げてぼんやりそれを見つめながら、つぶやいた。僕はそれを取り上げて、栓を開けたばかりの缶ビールと取り替えた。サンキュと口のかたちだけで僕に言った。

「初めての旅行だったの」

高梨さんはビールを飲まずにテーブルの上に置き、両膝を抱えて話し始めた。

「すごく嬉しかった。彼は奥さんのいる人で、いつもこそこそ会ってたから。時間も限られていたし。会ったとたんに別れる時間を気にしてた」

陳腐だ、と思った。思いたくなかった。この人を陳腐の海に沈めてしまいたくないと思った。そんな僕の心の中を察したのかどうか、高梨さんは僕の顔を見て寂しそうに笑った。

「ホテルに泊まって一緒に朝を迎えて、朝食をとってもまだ別れなくていいなんて、本当に夢みたいだった。柄にもなくはしゃいじゃった。彼も楽しそうだった。最高の時間だと思った。このままふたりでどこか遠くへ行けたらいいのって思った。釣竿持って、途中の雑貨屋さんで麦藁帽子を買って、川原に行ったの。有名な避暑地だったけど、そこは観光スポットでもないから、わたしたち以外誰もいなかった。流れる川の音と風に吹かれて草が揺れる音と、あとは蝉の声しか聞えなくて、見えるものは水と石と草むらと遠くの森と、空と、彼だけだった」

僕にも一瞬川の音が聞えるような気がした。きっと酔っているせいだ。目を閉じる。真っ青な空に、抑えきれない情念のように白い入道雲が湧き膨れ上がる。つばの広い麦藁帽子をかぶった高梨さんがたたずんでいる。

「彼は子どもの頃の思い出話をしてた。わたしはそんなのほとんど聞いていなかった。子どもの頃の彼のことなんて全然興味なかったもの。わたしには永遠に関係がないでしょう。でも、彼は繰り返し繰り返し話してた。わたしが聞いていないなんて、たぶんどうでも良かったんでしょ。ただ話したかったんだと思う。川の音とか蝉の声とか湿った風とか、そういうものがノスタルジックな気持ちにさせるのよ。わたしもそのときふいに思い出しちゃったもの」

高梨さんはそう言って、抱えた膝の間に口元を埋めた。僕は高梨さんが話し始めるのをただじっと待ち続けた。

「あんな女のどこがいいの」

唐突に硬い声を上げた。ぎよっとして彼女を見る。高梨さんは肩をすくめて、ぎこちなく苦笑した。

「て、母親がね、叫んだの。子どもの頃のこと。全然忘れていたんだけど、突然そのとき思い出しちゃった。一旦思い出し始めるとどんどん細かいところまで思い出されちゃって止まらなくなっちゃった」

それはまだ高梨さんが小学校に入学する前の夏のことだったという。母親とふたりで祖母の家に身を寄せていたところへ、父親がやってきた。両親は奥の座敷にふたりきりで籠り長い時間何かを話していた。幼い高梨さんは締め切られたふすまの前でじっと耳を澄ましていたが、何を話しているのか全く分からなかった。そのとき突然、張り裂けるようなその悲鳴を聞いた。

あんな女のどこがいいの！

「ぞつとしちゃった。ちょっと前、同じような声を自分も上げてたから。もう待つてばっかりなのは嫌なのって彼に叫んだの。同じようなほんとに同じような声だった」

それは不倫関係の間に交わされるよくある台詞なのだ。でも僕はもう陳腐だとは思わなかった。

「それで彼は旅行を計画してくれたんだ。笑っちゃうでしょ」

僕は黙ってビールを飲む。

「お母さんの声を聞いてすぐにお祖母ちゃんに外に連れ出されたの。外では従兄弟たちが水遊びしてた。お祖母ちゃんの家の前にはね、小さな水路が流れてて、みんなはだしになってぎぶぎぶぎぶぎぶ歩いてたの。わたしもはだしになって中に入った。水は冷たくて、気持ちよくて、薄暗い奥の部屋での尋常じゃない母親の声とかそういうのみんな嘘みたいに思った。ただ無心になって水の中を歩いた」

やがて家の中から高梨さんのお父さんが出てきた。お父さんは高梨さんに近づいて声をかけた。けれども高梨さんはぎぶぎぶぎぶぎぶ水の中をひたすら歩いていた。従兄弟たちは捕まえた蛙やザリガニを得意そうに高梨さんのお父さんに見せていた。

結局、それがお父さんとの最後になったのだという。まもなく両親は離婚し、数年たってお母さんが再婚し、新しいお父さんを本当のお父さんだと思って過ごしてきた。実の父親のことなどほとんど思い出したりしなかったのだという。

「それなのに一気に思い出しちゃったの、彼と魚釣りしているときに。本当はお父さんにどこにも行かないでって言ったかったんだなって、本当はお父さんのこと大好きだったんだなって、最後にお父さんの顔を見たかったって、お父さんに抱きついて、しがみついて、引き止めたかったって」

高梨さんは抱えた両膝をぎゅっと抱きしめた。まるで小さな子どもの高梨さんがそこにいるみたいだ。なんか分かんないけど、僕は彼女を思い切り抱きしめたくなった。いやらしい意味じゃなく、迷子を安心させるために大きく優しく包み込むように。持っていた缶ビールをそっとテーブルに置く。

高梨さんは顔を上げ、口調を変えて言った。

「そしたらな一んか冷めちゃったのよ、彼のこと」

抱えた膝から手を離し、縮めたからだを開放するように後ろに手を突いた。

「なんすか、それ」

抱きしめ損ねた僕は言った。

「求めてたのは彼じゃなかったってこと」

「なんすかそれ」

同じ台詞を繰り返していた。高梨さんはさあねと言うように肩をすくめる。

「なんか」

そんな高梨さんを横目で見ながら僕は言う。

「メリーゴーランドと変わらないじゃん」

「かもね」

僕たちは顔を見合わせて笑った。

「当分、恋はいいかな」

ひとしきり笑った後、高梨さんはつぶやいた。

僕は小さく頷いた。抱きしめ損ねて良かったと思った。

それから高梨さんとは行き会えば挨拶をするようになった。ときどき短い世間話もする。いつかまた恋をしてもいいかなという気持ちになったとき、そこにいるのが高梨さんだったらいいなと思わなくもない。

